

---

# 話し掛けてくれる人

haruxtuti

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

話し掛けてくれる人

### 【Nコード】

N5041Z

### 【作者名】

haruxtuti

### 【あらすじ】

短い、中学生のお話。

(前書き)

詩じゃないかもしれません……

僕はいつものように学校へ行きます。

僕はとてもとても弱虫で、泣き虫で、恥ずかしくて誰とも話せません。

皆は僕の事を無視します。

当然でしょう？ 僕から話し掛けないんだから……

話し掛けてきてくれる人なんて居ません。

「やーい、泣き虫、弱虫、いくじなし。悔しかったらなんか喋ってみるよ」

「……」

「だっせー」

一人の男の子が誰かに話しかけています。

暴言を吐いて、楽しんでいます。

それは誰に言った言葉なんだろう？

そう考えてしまいます。いつも、いつも、

体育に時間になって、今日はみんなでサッカーをする事になりました。

僕はただ立っているだけでボールをもらえません。

今、ボールを持っている男の子はいつも誰かに悪口を言っている男の子です。

それが誰かは分かりません。

「危ない！」

男の子が蹴ったボールが僕の方に飛んできます。

男の子は大きな声で叫びます。

ボールは見事に僕の顔に当たりました。鼻から赤い物が流れています。

男の子は僕に肩を貸して保健室まで運んでくれます。

いつも、誰かに悪口を言っている男の子が……

男の子は僕に話しかけてきます。

「なんで、いつも俺が悪口言うのに、何も答えないんだよ  
僕？」

「そつだよ。お前に言ったんだよ。なんでだよ」

「僕じゃないと思ったから」

僕は正直に答えます。

「なら、さ。今度は話してくれよ」

「え？ でも僕の事嫌いじゃないの？」

僕は男の子の言葉に首を傾げます。

「俺は、不器用なんだよ。誰かと話すのが恥ずかしくてつい悪口言っちゃう。だから本当はお前と話したいんだよ」

「そうなの？」

「ああ」

「じゃあ友達になってくれるの？」

「当たり前だろ？」

……僕は初めて友達が出来ました。

その友達も、誰かと話したくても話せないから、悪口を言って注意を引こうとしていたのです。

似てるようで似てない二人は友達になりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5041z/>

---

話し掛けてくれる人

2011年12月17日00時45分発行